

イーロン・マスクの自伝（上下二巻）が昨年発売された。在職中に宇宙開発を担当していた者として、早速入手した。彼が最初に手がけた仕事は職業別電話帳に手を加え、求職中の人が容易に適職にアクセス出来る方策を発想し、それを売り込み最初の資金を得た。自分の仕事は自分で探す米国の社会に適合したアイデアだった。

次の挑戦したのが、自分の力でロケットを開発し、衛星を打ち上げることだった。あたりを見渡せば、ソ連との開発競争にしのぎを削った時代に構築された大量な施設、また、それに従事した高度な知識と経験を積んだ人材が国内に控えていた。当時はNASA主導の時代で国威発揚のため、失敗は許されない。従って、膨大な国費を費やし厳しい宇宙環境に耐えられるように試験方法の確立と、その装置への投資が行われた。マスクはNASAのこの資産のみならず、軍の資産も活用した。原価償却済みであったこれらの資産は彼の目的のため活用できた。もし、スペースXの宇宙事業がゼロから出発であったら、膨大な開発費がマスクの肩にかかったはずだ。質の高い原価償却済みの資産や、過去の開発の参画した人材の活用ができた環境に恵まれていた。強運も才覚の一つかもしれない。彼の優れた実績はロケットの再利用を確立したことだ。これは揺るぎない彼の独自の才覚の現れだ。

そのマスクがトランプ大統領の式典に顔を出しているではないか。膨大な資金を動かせる人が大好きなトランプの政府の一員として任命されている。しかも雛壇では自己陶醉し踊っている。彼が重用される理由を考えると、費用対効果に優れた作業実績だろう。それを物語るが、任命された政府費用効果省を通じた官僚の削減であろう。私企業と異なり、官僚の役割は直接の損得勘定が現れない底力を担う部門が多い。そしてそれらの消失の意味が長い時間の後、表面化するものである。利益最大を狙う企業家のマスクにはたして、政府機関の活動の深読みができるのだろうか。